



# 大手前大学文藝部 定期刊行部誌Vol.1



2020年5月

大手前大学文藝部





# 目次

文藝部二回生 白夏	
うちでおどろう . . . . .	2
あとがき . . . . .	4
文藝部四回生 モッチー	
自己紹介 . . . . .	6
文藝部三回生 春野寒月	
〈偽り日記〉その① . . . . .	10
あとがき . . . . .	11
文藝部三回生 竹許弱音	
懺悔 . . . . .	14
あとがき 兼 ごあいさつ . . . . .	16
奥付け	
奥付け . . . . .	20



文藝部二回生 白夏

## うちでおどろう

「こんばんは～」

「こんばんは」

画面の向こうで、彼女が手を振る。

僕も手を振り返しながら応えた。

僕らにとってはいつもの光景。けれど、今は少し違う。

「なあ、今ごろ他のカップルも、こんなふうにビデオ通話してるんだろうな」

「そうだね。会えなくて寂しいのは、今はあたし達だけじゃないんだって思うとき、ちょっと悪くないかも、とか」

「はは、ちょっと不謹慎だけどな」

「まあね」

世界は今パンデミックの渦中で、僕らは終末がじわりと迫りくるような不安と共に、巣ごもりを強いられている。

「ずっと家に居てさ、暇だからネット見るくらいしかやることなくて」

「あー、こっちもゲームと楽器ぐらいだ」

「それでさ、こんな歌見つけたんだけど」

そう言って彼女は別の端末を取り出し、動画を再生し始めた。

そこでは見覚えのある男性アーティストが、アコースティックギターを弾きながら歌っている。

「いい曲だな」

「でしょ」

言葉を交わすと、すぐ曲が終わった。SeekBarに表示された尺を見てみると、わずか一分弱。

「短いな」

「まあね……それより、どこが良かった？」

興味津々といった様子で訊いてくる。その顔を見て、僕は彼女がこのアーティストが好きなことを思い出した。

「うーん……『生きてまた会おう』って歌詞」

「そこ！　あたしも好き！」

嬉しそうに顔がほころぶ。可愛らしくて愛おしくて、何度見ても慣れない。

「なんでそんなダラ~っとした顔してんの？」

彼女の言葉にハッとして、僕は自分の端末が送信している映像に目をやる。

恥ずかしくなるほどのニヤけ顔が映っていた。正直気持ち悪い。

「.....いや、なんか、ごめん、めちゃくちゃキモい顔してた」

「そうかな？ あたし嫌いじゃないよ、あの顔」

「やめろ、恥ずかしい」

平然と爆弾を落としてくる彼女への対応に慣れるのは、いつになるだろう。

「ええ~。でさ、あたし今から手拍子するから、踊ってよ」

「はあ.....？」

唐突なリクエストに、思わず苦笑が漏れた。

「そんな、ダンスとか上手くないんだけど.....」

「いいの。歌と同じことがしたいだけ」

そう口にして、彼女はさっきの曲を流し始めた。

「はい、踊って、ほら」

小気味よいハンドクラップを響かせながら、彼女は僕に促す。言われるがまま、うろ覚えのツイストもどきを踊ってみる。

「待ってなんかぎこちない！」

彼女は叫ぶやいなや、フレームアウトして——ベッドに倒れ込んだ——、あとは両耳のイヤホンが、彼女の笑い声を伝えている。

「悪かったな、運動音痴の恋人で」

彼女は五分間存分に笑い転げ、落ち着く頃には、話せる時間のギリギリになっていた。

「はあ~おかしかった.....久々にこんなに笑った.....」

「そりゃどうも。ところで、時間いいのか」

「あ、ほんとだ.....」

「切り上げか？」

「うん.....」

彼女は顔より声に出る。これはきっと(もっと喋りたいのにな)という意味だ。

「じゃあな、おやすみ」

「うん.....」

「.....」

彼女の顔を見つめて一瞬、僕は息を吸い込んで、きちんと声を出せるようにした。

「生きてまた会おうな、愛してる」

## あとがき

どうも、二年の白夏(はな)です。

もう五月なのに、二年生になった実感が湧きません。キャンパスが恋しいです。引きこもっていたら三キロ太りました。前ページまでのお話は、その事実への悲しみを抱えながら書いたものです。

さて、今月号には「自分の趣味や好きな本について書くように」とお達しがあったので、順に紹介していきます。

まずは趣味について。私の趣味はもっぱらインドア派で、頻度の高い順でいうと、ツイッター、音楽鑑賞、物書き、ピアノになります。ツイッターIDは@Hana\_novelsでやっていて、好きなアーティストは米津玄師、ヨルシカ、ヒトリエ、星野源、サカナクションなどです。ピアノは十年のブランクを挟んで、去年独学で再開しました。

次いで好きな本について。中学生の時に読んだ本で、三秋縋氏の『いたいなの、とんでゆけ』です。友人を自殺で亡くした青年と、特定の出来事を〈なかったこと〉にできる少女が主な登場人物で、少し残酷な描写がありますが、終盤、読み始めからは想像もつかない展開とともに、私の理想の男女の形のひとつが描かれている、お気に入りの小説です。

そして好きな本のジャンルについてですが、どうにも形容しがたいです。しいて言うなら、食べ物の描写が美味しそうなお話や、仄暗くも暖かい繋がりのある人間関係の話が好きです。

最後に、ここまで読んでくださってありがとうございました。また来月の部誌でお会いできれば嬉しいです。

二〇二〇年 五月



文藝部四回生 モッチー

## 自己紹介

新四回生の藤井ことモッチーです。

今回は自己紹介ということで、私のオススメ本の紹介や小話を交えながらやっていきたいと思います。

私は小さい頃、小説よりも漫画や絵本を読む方が好きでした。しかし、小学生の時に「精霊の守り人」というファンタジーフィクションの単行本に出会ったのがきっかけで、小説を読むようになり、今では本の中で一番好きになりました。

そんな過去を持つモッチーですが、文芸部に入部したのは2年生の終わりから、という遅めのスタートで、現在は就職活動や教職の勉強に勤しんでいるのでほぼ引退状態、部室にたまに顔を出す程度になっています。

定期刊行される部誌では、余裕がある時に執筆をさせていただくことになると思います。TRPGを趣味でやっているの、そっちに活かされるようなシナリオを書きたいと思っています。

興味のある方は是非、ご覧ください。

それでは、本誌発行に当たって部員に与えられた課題を回答していきたいと思います。

『好きな本は？』

価値観を変えた「精霊の守り人」はもちろんですが、同じジャンルのライトノベル「狼と香辛料」や青春群青劇の「僕の小規模な奇跡」が好きです。是非、読んでみてください。

『好きなジャンルは？』

大衆文学やライトノベルになるのですが、「サスペンス」や「ファンタジーフィクション」とかが好きです。前者は東野圭吾さん、後者は支倉凍砂さんの作品をオススメします。

『趣味は？』

サイクリング（建前）、ゲーム（本音）です。全然文藝関係ないのでは？と、突っ込まれそうですが、意外とそうではないですよ？

同じ風景でも車窓から見たもの、徒歩で見たもの、自転車から見たもの、では全く異なるものに見えるので、風景などを適切に表現するためには実際に経験してみることが必要になるのです。そのための足としてはもちろん、座って作業することの多い執筆作業には気晴らしの「サイクリング」がもってこいなのです。

ゲームにも利点はあります。ゲームシナリオにはそのシナリオを書いたプロのシナリオライターの方がいますので、プレイを通してシナリオから着想を得たりだとか、同じジャンルでも作品ごとに異なるアプローチ方法を学び、表現のバリエーションを豊かにしたりだとか。

御託を並べましたが、結論「日常生活のいかなることも無駄ではない」ということです。

事実は小説よりも奇なり、という言葉しかり、日常生活の中でしか見つけられないようなドラマチックがあるかもしれません。そんなものを見つけて、文章で表現できれば楽しいだろうな、と思う今日この頃です。



文藝部三回生 春野寒月

## 〈偽り日記〉 その①

20XX/O/ST/

今日から死ぬまで、今の心情を書き残すことにした。

私は一人を好む人間だ。

学校でも友人といえる人は、指で数えられる程度しかいない。

だけど、それでいい。

一人を好む私からすれば、大勢かつ大声で騒ぐような人間には毎回苛立ちを覚える。

そういう奴らと関わらないためにも、イヤホンで音楽を聴いて壁を作る。

一人で何が悪い。

むしろ騒いで他者に迷惑をかけていないのだから、悪いことなど一つもない。

授業で出された課題をこなす時だって、大勢で同時にやるよりも一人の方が集中できていいじゃないか。

いつも一人でいるからって見下すような目で見てるあいつらが嫌い。

数では私の方が不利だから、一人ずつ懲らしめてやろうか……？

そうすれば恐怖で口数も減って静かになるだろう。

うん。そうしよう。

よし、早速準備に取り掛かるとしよう。

仮に警察沙汰になったとしても、私が犯人だと特定されるはずがない。

――今日はここで終わりにする。

## あとがき

どうも初めまして、文芸部の副部長を務めます春野寒月（本名が知りたい人は文芸部へお越しを）です。

恋愛の経験はないくせに執筆する内容のジャンルが毎度の如く「恋愛」なんていう妄想が詰まった小説を執筆してます。

でも実際のところ妄想だけだと結構、筆が止まることが多いので恋愛系の本を読んで参考にさせてもらってます。（一番気に入ってる本は、「アンドロイドの恋なんて、おとぎ話みたいってあなたは笑う?」ですね。ラストは驚かされました）

趣味は.....ご想像にお任せします。（単純に思いつかないだけ）

このままだと部長に内容が薄いだなんて怒られそうなので、何かしらを綴りたいわけですが.....やはり思いつきませんね（笑）

初回からこんな感じですけど、手に取って読んでくれた方には感謝の気持ちしかありません。





文藝部三回生 竹許弱音

## 懺悔

記憶が弾ける音がする。一緒に見た風景が、水底から水面を目指す空気の泡みたいに浮かんで消えていくから。空一面を淡い色で染めた桜、傘の下から見えた色とりどりの紫陽花、真っ白の太陽を粉々にして散りばめた海、冷たい風においをつけた紅葉たち、寒ささえ忘れさせた暖かな人工の光、そして、二人で笑いながら観たテレビの番組。

僕は、その光景に目が眩んでいて、てっきり彼女の黒い瞳の中にも同じ世界が反射しているのだと勘違いしていた。『不安』という底まで濁ったプールの中を毎日、泳いでいたのは彼女だけで、僕はただプールサイドから声を掛けていただけに過ぎない。風景が彼女にとって、息継ぎの合間で目に映った一瞬であったと理解したのは、彼女の血肉が火葬場で灰になった頃だった。その時は、涙は流さなかったと思う。日常と一緒に藻掻いたつもりでいたから。

あの日とは違うグレーの空を見つめながら、目的もなく歩き続ける。時計も財布も、携帯電話すら持たずに家を出た。家族にも友人にも、目的も何も伝えていない。彼女の命が終わった二〇一七年七月二十七日は、明るい印象の彼女にピッタリな、日本晴れだった。もしかすると、今日は僕がこの罪の念に、罰を与えるべき日なのかもしれない。誰にも裁けないこの罪には、僕自身が終止符を打つべきだ。

単純な言葉だけをかけ続ければ、いつかは救われると考えていた。何度も自分を詰めた言葉をまた、心に突き刺してみる。だけど、太い血管が締まった気がするだけで、何も変わらない。こうするだけであの時の気分を不思議と思い出せるのだ。彼女の手を取って挑む覚悟も、無念を晴らそうとする気も持てなかった、惨めなあつら。死体のように冷たくて硬い思考で振り返ると、はっきりと言える。暗い現実から目を背けて、抗おうと賢明に向き合ったのは渦中にある彼女だけだった。目を凝らさなければ正体の分からないだまし絵のように、幻の中にある現は触れなければ気付けない。

気に食わないというのが彼女を傷つけていた周囲の言い分だ。この世にはもういないのに、彼女らは今でも陰で嘲笑い続けている。学校という小さな箱の中でなら、窮屈さから他者を傷つけるなんてことはどの時代でもあることだ。僕はその行為の一切を消せないと思うし、大人が蚊帳の外から指摘しても、何も変わらないと知っている。でも、手を差し伸べることは誰でもできるのだ。誰かが沈んでいく彼女の手を取り、引っ張り上げることはできた。そして、その義務が僕にはあったはずだ。

だけど、僕は幼馴染の彼女を想う気持ちと、獣のもつ牙みたいな敵意を向けられることを比べて、自分自身の保身を選んだのだ。そのくせ、一抹の罪悪感に似たチープな感

情をぶら下げ、見えないところで彼女に接した。情けないなんて簡単に言い表せたのなら、どれほど楽だろうか。僕に突き付けるべき言葉は複雑で、肉を削ぐ冷たいナイフでなければならない。足のつかない海のように罪深いことをしたのだから。

僕は今でも、彼女が辿ってしまった運命が、なぜこうも残酷だったのかと考えてしまう。彼女が目の前で落ちていった時を、どんな過去よりも鮮明に思い起こせる。身体の骨の割れる音も、誰かの悲鳴も、ほんの数センチ届かなかった指先も、何もかも。人は死ぬ時に、必ず地獄のある方向へと引っ張られてしまう。それはどうしてかと考えていたことも、僕は覚えている。安らかに眠るべき人間も、悪の限りを尽くした人間も、みんな平等に最後は重力に逆らえないまま倒れてしまうのだ。彼女も例外なくそうだった。

呆気なく幕を閉じた十七年間と、それを見届けたことで幕を開けた後悔の余生。彼女の持つ温もり、感覚を塞ぐ甘い匂い、須臾も崩さなかった笑顔、全てが頭の中だけに刻まれてしまっている。僕が憶えていていいものじゃない。かと言って、他の誰かが持つべきものでもない。すぐに壊れてしまうヒトの海馬なんて信用に値するものではないからだ。

通りを歩いていると、我慢の限界にきた空から雨が降り始めた。たった数滴、落ちてきただけで一気に勢いを増してしまい、指の先すら見えない程になってしまう。タイミングを見計らっていたかのように、近くには雨宿りをする場所が見当たらない。傘なんて持っているわけもなく、ただ濡れていく身体が震えていくのだけが分かった。前髪が額に張り付き、それを伝って落ちる水が、口の中へと入っていく。空の零した味は甘く、ほんのりと人工的な苦さがあった。何度も飲んだ涙に似た味だ。

もしかすると、僕たちは誰かに運命を描かれているのだろうか。重なる声と音、点と線の集合、人形同士の会話、偽りを被った演者、羅列される文字の数々。ただその誰かが見たい結末を迎えるためだけに、その媒体を使って勝手に進められている。落ちてきた雨粒も、僕が感じた全ても、甘みを引き立てる苦さのような、あっても無くてもいいものなのかもしれない。だから、彼女の死でさえも、創られた世界の仕組みに則っただけだったと考えてみる。

雨脚が一層、強くなった。正解に祝福の意を表する拍手のようだ。いや、もしかすると、都合の良い解釈への批判かもしれない。

身体は重たく濡れているのに、心は罅が入りそうなほどに乾ききっていた。彼女もこんな雨の中を彷徨っていたのだろう。彼女は想像もできないくらい強かったのだと思い知った。もしも濡れた衣を乾かせる場所を与えてあげられたのなら。誰も許してくれる人なんていないのに、誰かに許してもらいたくて堂々巡りをしてしまう。

暗雲の中に迷い込んでしまったみたいに、前が見えにくくなってきた。本格的にまずいかもしれない。自分の意思に反して、身体が小刻みに震えはじめる。目を閉じると意識までも揺れていることを感じてしまう。瞼の裏に君の笑った顔が浮かんできた。いつだって僕は君といた時間だけを再生している。これも歪んだイメージなのだろうか。

今すぐにでも君に会いに行けるのなら――

皮膚の壁さえ忘れさせる強い明かりが光りはじめた。もしかすると、神様が願いを聞き入れてくれたのかもしれない。天使がラッパを吹いている。

彼女のいる世界は、どんな景色が広がっているのだろうか。淡い期待が心臓を、血管を、

脳細胞の全てを駆けている。

ゆっくりと目を開いたその先には、雨粒と雑音に塗りたくられた現実が、真横を向いてあった。

「神様……？」

視界に映った赤い単眼の、大きな人間に僕は眩いてみる。何も語らない。ただ、代わりに聞こえてきたのは、トラックのクラクションみたいな甲高い叫びだった。そうか、この人は僕にピストルを向けてくれたのだ。揺れていた意識が水に溶けていく。

これでやっと、罪を償いに行ける。

## あとがき 兼 ごあいさつ

はじめまして。文芸部部長の竹許弱音です。今年で三回生になるのですが、もう三回生か、という気分です。キャンパス裏にあったショッピングモールが懐かしい……

今回は自己紹介というテーマを出したのですが、私自身が何を書けばいいのか迷うという結果になりました。お恥ずかしい。ただ、何を書こうかと自問自答してみた結果、一番の紹介はやはり、作品を書くことだという結論に至りましたので、今回は掲載させていただきます。こういう文章を書く人です。

さて、ここからは私が色々出したお題について触れていきたいと思います。趣味ですが音楽を聴くことが好きです。読書もちろん好きですが、どちらかと言われれば音楽に偏っている傾向があります。特に好きなアーティストは『凜として時雨』ですね。自分の書く小説の中にも、曲に出てくる歌詞をなぞったような言葉を入れてしまうことが良くあります。語り出すと何ページにもなりそうなのでこの辺で……

好きな本は太宰治の『人間失格』や深緑野分の『オーブランの少女』、他にも西尾維新の『戯言シリーズ』などが好きです。『人間失格』は色々と考えさせられるものがあり、今でもたまに読み返したりします。『オーブランの少女』は、文章の書き方が凄く美しく、こんな文章を書きたい、と思った原点的な作品なので取り上げました。『戯言シリーズ』に関しましては、少し捻ったような考え方が面白くて好きですね。色々と考えられるような作品が好きかもしれません。

続いてジャンルですが、特に読むジャンルはまちまちです（申し訳ない）。強いて言うならば、推理やホラー、純文学、人間ドラマ等々でしょうか。私的には、ラヴクラフトなども好きなので、そういった傾向が強いかと思います。後は初めて読んだ小説が石田

衣良の『池袋ウエストゲートパークシリーズ』でしたので、そういったジャンルを好き好んで読んでいる感じです。ということで、今回の部誌ではここまでとさせていただきます。

最後になりましたが、ここまで読んでいただいた読者の皆様はもちろんのこと、今回の部誌に参加していただいた部員の皆さんも、本当にありがとうございます。社会的問題が絡んでいることを除いても、創刊号の発刊までに手間取ってしまい、多大なるご迷惑をおかけしました。しかし、こうして発刊にこぎつけることができたのも、部員みなさんのご協力があったからです。これからもどんどん部誌を発行していきますので、ご期待ください！

長々と書いてしまいましたが、今回はこの辺りで。また次回、お会いしましょう！

二〇二〇年 五月 竹許 弱音



奥付け

## 奥付け

大手前大学文藝部定期刊行部誌 Vol.1

発行日 2020年5月

著者 白夏 (Twitter @ Hana\_novels)、モッチー、春野寒月、竹許弱音

発行元 大手前大学文藝部 (Twitter @NewOtemaeBungei)

連絡先 Otemae\_bungei@yahoo.co.jp





---

大手前大学文藝部定期刊行部誌Vol.1

---

版番号の予定

{{  
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---